

子どもの歌のピアノ演奏における運指指導の取り組み

—「ミソラド=1235」ポジションの実践を通して—

The Advice on Piano Fingering for Children's Songs:
Through the Practice of "EGAC=1235" Finger Position

キーワード：ピアノ教育、運指、指使い、子どもの歌

三好 優美子

I 研究目的

幼稚園などの保育の現場では、子どもたちの活動と音楽は密接な関わりがある。朝のごあいさつから始まり、お弁当～降園といった一日の流れや、四季の情景・行事など、子どもをとりまく環境について歌とともに体験することが多い。そのため教員は子どもの歌¹⁾を歌う機会が多く、多くのレパートリーを持っていることが重要である。それらの曲はピアノで演奏するのに加え、「弾き歌い」まで求められる。短期大学入学時に初心者であった学生にとっては、限られた期間で子どもの歌をスムーズに演奏したり、子どもに歌を指導できるレベルに到達することは、とても難しいのが現状である。ピアノ経験が少なく、練習方法が確立していない学生の援助となる指導法を模索する中で、筆者は運指に着目し、指導に取り入れてきた。

出版されている子どもの歌の楽譜の中には運指の記載がない楽譜があること、また、保育の現場では手元だけを見て演奏するのではなく弾きながら歌ったり、子どもたちへの目配りが必要であることから、筆者は鍵盤上で、ある音列に指を固定して置く手の位置(ポジション)の変化を少なくすべきと考えている。楽譜に推奨する運指番号を記入していくうち、一部の音列に特定のパターンがあることに気付いた。それが「ミソラド=1235」ポジション(以下E-pos.)である。これは、子どもの歌の楽譜で、右手が歌と同じメ

ロディーをたどる形における運指パターンである。この提案と有効性の検証について筆者は2009年の本学紀要で発表した²⁾。

指導を続けるうち、運指調査をしてE-pos.の提案を行った時に比べ、授業内の個人レッスンでの提案や説明だけでは、学生の運指に対する反応や意識の維持が少ないことに気づいた。指導法の考察のためには学生の現状を把握することが不可欠であると考え、改めて運指調査の必要性を感じた。

本研究の目的は、授業でより効果的な指導を行うために、今年度の学生の運指傾向を明らかにすることである。

II 研究方法

1. 調査対象：東京女子体育短期大学
児童教育学科 2年生 22名
2. 調査期間：平成23年5月
3. 調査内容：子どもの歌の運指調査(右手)

- ①「おかえりのうた」
- ②「とんぼのめがね」

上記二曲について、学生本人が楽譜に運指を記入、または筆者が書きとった。

III 結果と考察

①「おかえりのうた」

調査に使用した楽譜を譜例1に示す。「 」で囲んだ小節がE-Pos.を利用して演奏できる部分である。記入した数字は筆者が推奨する運指番号である。

前回の研究では、「おかえりのうた」第5～8小節（以下小節番号はTと表記）のみの運指調査を行ったが、曲の前半にはE-Pos.ではなく「ミ=3」と取るのが最適な部分があり（T1*印）、混乱するといった意見が学生からあったため、今回は全曲について運

指調査を行い、音列A～Iに区分して考察した。

音列Aは全員が「5532」の運指を選択したため、図は割愛する。

音列Bでは、ハ調長音階に見られる、「ドレミファ=1231」という運指（譜例2）よりも、「ドレミファ=1234」を選択する学生がやや多く見られた。「1231」および「1212」を選択した学生は、続く音列Cでの選択はそれぞれ1種類に限定したものとなった。

すなわち、音列B=1231の学生は全員が音列C=22332へ、音列B=1212の学生は全員が音列C=33443へと移行でき、音列B～Cとスムーズに演奏できたのである（図3）。音列B=1234を選択した

おかえりのうた 天野 蝶 作詞
一宮 道子 作曲

The musical score is in treble clef, 4/4 time. It consists of two staves. The first staff has measures 1-4, and the second staff has measures 5-8. Fingerings are indicated by numbers 1-5 above the notes. Measure 1 (A) has fingering 5. Measure 2 (B) has fingerings 3 and 1. Measure 3 (C) has fingering *. Measure 4 (D) has fingering 1. Measure 5 (E) has fingerings 1, 2, and 1. Measure 6 (F) has fingerings 1, 2, and 1. Measure 7 (G) has fingerings 2 and 3. Measure 8 (H) has fingering 1. Measure 9 (I) has fingerings 2 and 1. Measure 10 has a final note with no fingering.

譜例1 「おかえりのうた」

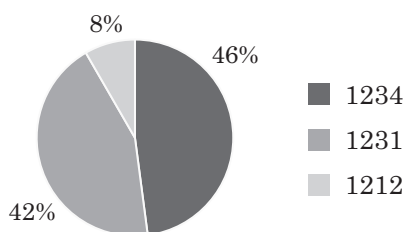


図1 音列Bの運指

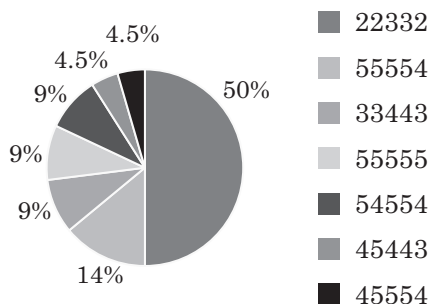


図2 音列Cの運指



譜例2 ハ調長音階と右手運指

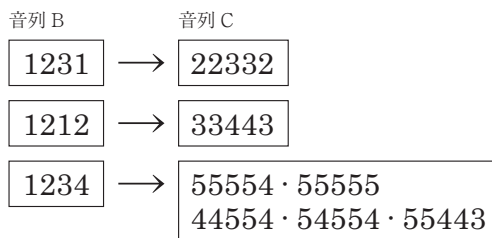


図3 音列B→音列Cへの運指進行

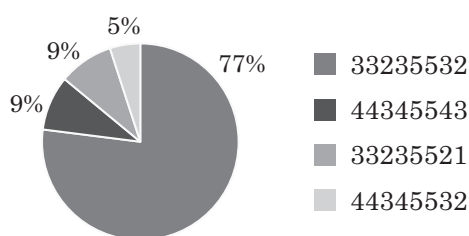


図4 音列Dの運指

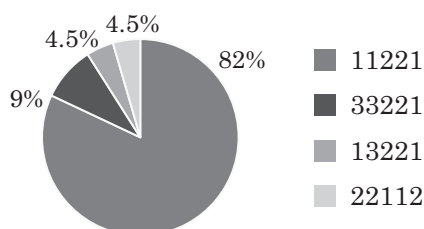


図5 音列Eの運指

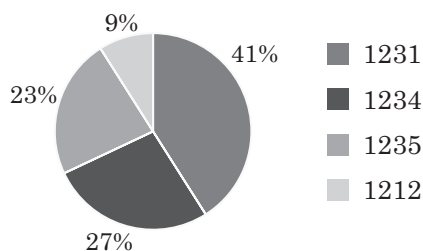
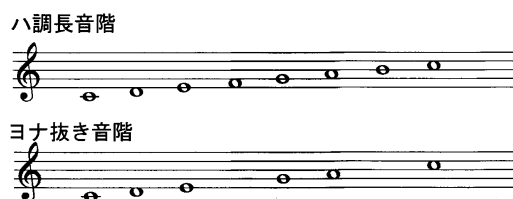


図6 音列Fの運指

学生は、同じポジションのままで指が足りなくなり、音列Cがスムーズに演奏できないため、新たなポジションを探り、運指選択に迷いが生じていた。その結果、音列Cにおける運指が5種類に増えたのではないかと考えられる。

音列Cにおいて「22332」、「33443」以外の運指を見てみると、5まで使用した後に指が足りなくなり、5と4を継ぎ足して演奏する様子が多く見られた。4や5の指は1-3に比べ指さばきがスムーズではなく、ミスタッチも多く見られたため、よりよい運指を選択する必要性が感じられた。ただし「54554」を選択した学生はスムーズに指を換えることができていたので、この学生には合っていた運指といえる。

音列Dでは「33235532」という運指を選択した学生が80%近くおり、偶然か意図的は判断できないが、



譜例3 ハ調長音階とヨナ抜き音階

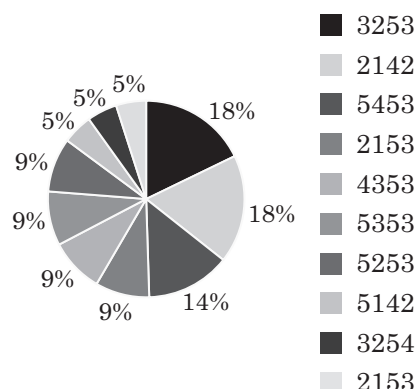


図7 音列Gの運指

どの学生も最高音を「ド=5」と配置していた。

音列Eでは「11221」を選択した学生が80%を超えたが、「ミ=3」と配置し直す学生もいた（「33221」・「13221」）。また、ここでは旋律が下行するなかで最低音であるドに1の指を配置しようとする共通の姿勢が見られた。音列Dにおける最高音ドの場合同様、こちらも偶然か意図的は判断できないが、下のドは1、上のドは5と無意識的に配置しているのではないかと考えられる。

音列Fで最も多かった運指は「1231」である。ハ調長音階であれば「ファ」が存在するのだが、この音列ではミの次にファの存在がなくソへ移動する、いわゆる「ヨナ抜き構造」になっている（譜例3）³⁾。

ここでは「ドレミソ=1231」をスムーズに弾けた者もいたが、指をくぐらせるのに時間がかかったり、くぐらせた後のソの音でミスタッチをしたりする者も少なからず見られた。E-Pos.である「ドレミソ=1212」と選択した学生はわずか2名（9%）であった。

音列Gでは10種類に運指が分かれ、音列C同様、学生の運指選択に迷いが見られたが「ドラ=53」という共通の傾向が見られ、これは全体の77%となった。

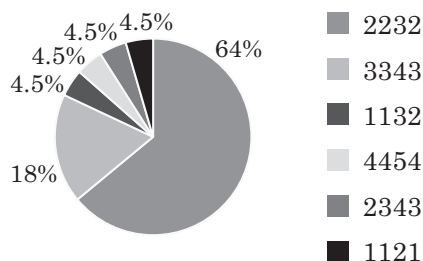


図8 音列Hの運指

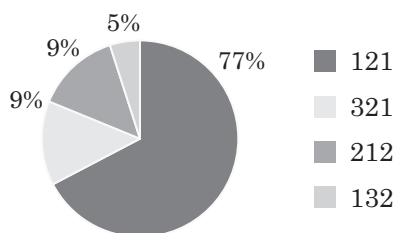


図9 音列Iの運指

音列Hではそれまでの10種類から6種類へと運指が減り、迷いが減ってきているように見える。ここでは2232、3343といった、同音連打の中での指かえ(例: 2343)をしない運指の方が好まれている。

音列Iは、音列Eとはほぼ同じ「ミレド」である(ただし音列Eでは付点のリズムとなり、ミとレを二回ずつ鳴らしている)。リズムの違いはあるが、最も多く選ばれた運指は「121」、次いで「321」という結果は共通であった。

②「とんぼのめがね」

調査に使用した楽譜を譜例4に示す。「おかえりの

うた」同様、「 」で囲んだ小節がE-Pos.で演奏できる部分であり、記入した数字は筆者が推奨する運指番号である。

この作品はE-Pos.と、「ドレミファソ=12345」と置く基本ポジションの一部(ドレ=12)という、2つのポジションから構成されており、曲全体の音列をこの2つのポジションで単純に把握できると筆者は考えていたが、多くの学生に迷いがみられたため、運指調査を行い、音列a～fに区分して考察した。

音列aは、全員が「11332212」を選択したので図は割愛する。

音列bにおいてE-pos.である「ミ=1」という発想があった学生はわずか2名であった。ピアノの経験年数が長く、ソナタ程度が演奏できる学生⁴⁾でも3344の運指を選択する様子が見られた。

音列cは一段目の終わりであり、かつ音楽的フレー

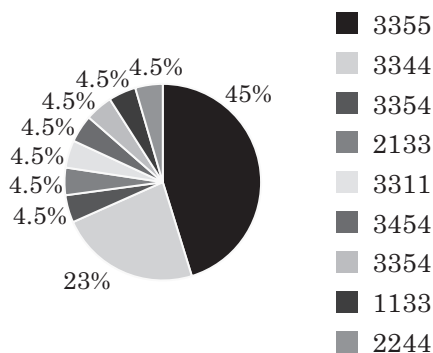


図10 音列bの運指

とんぼのめがね

額賀 誠志 作詞
平井 康三郎 作曲

譜例4 「とんぼのめがね」

ズや歌詞の切れ目であり、気持ちも一段落つくせいか、次の音に向かう(準備する)意識が欠けやすいのではないと思われる。実際、そこで一呼吸ついてしまい、続くドの音を慌てて探す学生の姿が見られた。T4のラに5を配置した学生が多かったが、理由としては偶然そうだった、あるいはT1～4という一段目にお

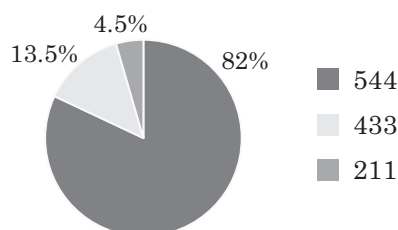


図11 音列cの運指

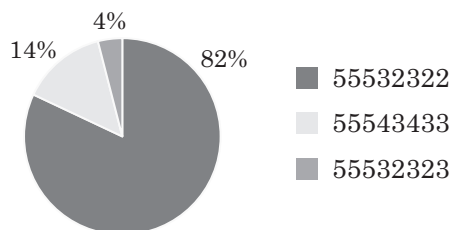


図12 音列dの運指

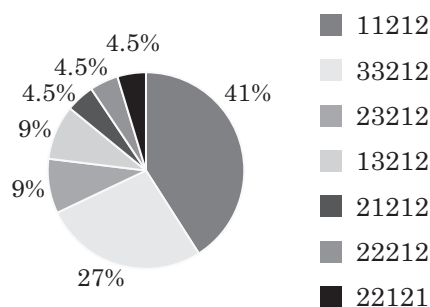


図13 音列eの運指

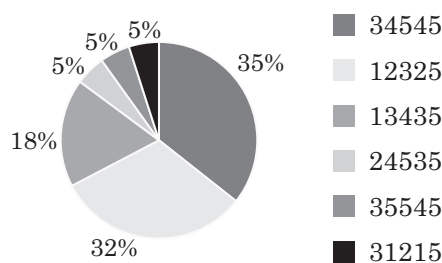


図14 音列fの運指

ける最高音と捉えた結果ではないかと考えられる。しかし次のT5最初の音であるドを意識しての配置とはいえない。その発想があった学生は全体の20%弱であった。

音列dから音列eにかけては下行の音列である。ここではE-pos.である運指「55532322」を選択する学生が82%に増えた。全体的にT5「ドドドラ」を「5553」と選択する学生が多く、計86%であった。

音列eでは「ミレド=121」が最も好まれ、続いて「321」と、「おかえりのうた」での音列Eや音列Fと同様の結果となった。

音列d-eの一部(T2～4)は、音列a-cの一部(T6～8)の逆行である(譜例5)が、上行形では「ミソラ」という音列に迷いが生じたのに対し、下行形「ラソミ」となると辻褄合わせが(偶然とはいえ)できており、手の動かし方も下行形の方が弾き易そうに見えた。上行形の時には合計9%だった指の置き換えが下行形では少し増え、計18%となった。

音列fはE-pos.そのものといえる音の配置だが、最も多かったのは「34545」であった。どの運指を選んだ学生も最高音のドでは5の指を選択していた。音列fは、T3-4と続くT5の最初の音を含む音列(ミソラソド…音列b'とする)と音の配置が共通している。しかし音列b'の時に比べ、音列fでは「ミ=1」と配置する学生が半数に増えた。その原因はT9にはドやレの存在がなくミから上行するため、1を配置できたためではないかと推測できる。



譜例5 「とんぼのめがね」T2～4とT6～8の音列



譜例6 「とんぼのめがね」T3～5(音列b')とT9～12(音列f)

IV まとめ

今回の調査結果から以下のような学生の運指傾向が判明した。

- (1) ミを3でとることが根強い。
- (2) 「ドレミファソ=12345」という配置を好むが、その先の高音域についての準備が見られない。
- (3) 先の音型よりも、その場のみの運指を選びやすい。
- (4) 中音域上行型での迷いが見られる。
- (5) 高音域から下りてくる場合は中音域は上行の時に比べると迷いが少なく、意図的でないにしろ、辻褄合わせができています。
- (6) ピアノ経験者であっても、運指についてあまり意識していない。
- (7) 同じ音列でも、小節内での配置やリズムが異なると見落としやすい。
- (8) 無計画な運指を選択すると、その先でさらに運指選択に迷いが生じ、ミスタッチを誘発しやすい。



譜例7 音域

(1)～(4)はある程度予想された内容であったが、(5)～(8)については、今回の調査で新たに明らかになったことである。まとめて調査することにより、個別に対応していた時には見えなかった要素が浮かび上がった。

(7)に見られるように、音型が同じであるのに登場する際のリズムが違うことによって、戸惑ってしまう(「とんぼのめがね」での音列b'とf)という実態について、学生たちは音列b'は「よくわからないけれど弾きにくい」、音列fは「運よくはまった」という意識でしかなかった。E-Pos.でのまとまりを指摘すると驚き、「こん

なに単純だったのか」「同じ音型なのにどうして気付かなかったのか」という意見も出た。このことから、学生たちが音列やパターンを捉えて演奏していないということが浮き彫りとなった。

これらの現状をふまえて筆者が新たに学生たちに提案した運指アドバイスは次のとおりである。

- (1) E-Pos.の全ての音を掴むのは無理でも「ミ=1」という技を覚えておく。
- (2) 「4小節の最低音と再高音を把握する」ということは今までにも伝えてきたことであるが、今回は更に「最低音より最高音を優先して運指を決定する」ということを加えた。
- (3) ハ調長音階の運指を再確認する。
- (4) 4小節を1つのグループとして考えた場合、4小節内の運指だけではなく、それぞれのグループの繋がりを意識する。グループ最後の音から、次のグループ最初の音へ移動することにも意識を向ける。
- (5) E-Pos.のように、手の形を保持することを覚える。ポジションという意識を持つ。
- (6) 音列による把握。同じ音列は同じ運指を選択すると効率よく練習できる。上行形で弾きにくい音列があれば、音列を逆にとり、高音域から指をあてはめると、弾き易い運指が見つかることがある。

V 今後の課題

毎回レッスンでは個人の傾向や指の癖に応じてアドバイスをを行ってきたが、まとめて運指調査をすることで、新たに学生の傾向が明らかになり、解決の糸口となる対応策を見出すことができた。ピアノ指導者にとっては簡単だと感じる点が、学生にとっては大きな問題や迷いとなることがある。今回の調査と並行して、E-pos.を学生には勧めたが、それなりに妥当な運指を用いている学生や、新しい要素を取り入れると混乱する学生には無理に変更を勧めないようにした。運指指導というのはあくまでも「守らねばならない面倒なこと」ではなく、「演奏をスムーズにするための

援助」だと考えている。授業でのさまざまな実践を通して、問題は運指に限定されることなく、楽譜を読み、音列を把握することにあるのではないかと考え始めている。

今後の課題は、子どもの歌について更に多くの調査を行い、学生にとって迷いが生じやすい音列や、その原因を探ることである。E-Pos.は、ヨナ抜き音階で作られた曲にのみ有効な運指パターンであるが、ヨナ抜き音階を使用していない曲やハ長調以外の曲においても、有効利用できる運指パターンが内在していないか探していきたい。

付記

本研究は日本音楽教育学会第42回大会(2011)での口頭発表に加筆修正したものである。

注釈

- 1) 本研究では「子どもの歌」とは、童謡・わらべうた・行事の歌・幼児歌曲など、幼稚園の現場で用いられる曲全般を指す。
- 2) 三好優美子(2009):子どもの歌のピアノ演奏時における「ミソラド=1235」ポジションの有効性.東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 44, pp. 67-75
- 3) ヨナ抜き音階とは明治時代に使われた名称で、ドレミソラドの五音音階をさす。
浅香淳(1977):新音楽辞典 楽語, p. 585, 音楽の友社
- 4) ここでの演奏能力の段階は難易度の低い順に初心者ーバイエル(修了)ーブルグミュラーーソナチネーソナタと筆者が設定したもので、当該学生は演奏能力が高いといえる。

参考文献

- 1) 在原章子, 菊本哲也, 柳田憲一, 山内悠子(2007):新版 和音伴奏による幼児のうた100曲, 全音楽譜出版社
- 2) 浅香淳(1977):新音楽辞典 楽語, 音楽の友社
- 3) 田島孝一(2007):Finger-Walking Methodの

基本理念とその学習法(Ⅲ)～物理学・力学的視点に基づいたピアノ奏法～神戸女学院大学論集, 54-2, pp. 120-138

- 4) エリーザベト・カラント, 原田吉雄訳(1988):デッペのピアノ奏法理論, 全音楽譜出版社
- 5) トバイアス・マティ, 大久保鎮一訳(1993):ピアノ演奏の根本原理, 中央アート出版社